

二七八

雪譜

初編

中



北越雪譜初編卷之中

目録



雪類ゆきるい人小災ひとこわざを。次第下ついでのつつ

寺てらの雪類ゆきるい

玉山翁ぎよさんの雪ゆきの圖ず

越後ちご縮ちぢ

縮ちぢの種しゅ類るい

縮ちぢの紵す並な紵す績しつ

縷いと綸りん

織をり婦を

織をり婦をの發は狂きやう

御おん機き屋や

御機屋おんきやの靈威まのゐ

縮ちぢをを兩りやうをを並な縮ちぢの市いち

りらら

雪中せちゆち花水はなみづ税ぜいひ

菱山ひしやまの奇事きじ

秋山あきやまの古風こふう

狐火きつぱ

狐きつを捕とる

雁かりの代見立しろみえだて

天あまの網あみ

雪譜卷之四

目

又海堂藏

雁かりの總立そうだて

浩海川こうかいがわのしりり

通計二十四條

北越雪譜初編卷之中

越後塩澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人面樹 刑定

○雪類人小災也

吾住魚沼郡の内にて雪類の為小非命の死をうくる事其村の人の事を
てふ小記もあらずども人の不祥なる人姓名を詳小せば○てふ何村との小形小家
内の上下十人あまりの農人あり主人ハ五十歳をり妻ハ四十小さらば世息ハ二
十あまり娘ハ十八と十五といづとも孝子の聞ありけり一年二月のそドめ主
人ハ朝より用ある所出行し其日ハ已小申の頃あきと飯りきりてびきの間を
とるべき用中もあきりけりけり家内不審ふかり忪家僕をつきて其家小のり
父が事をたづねふていささびといふあきりてあきりてあきりてあきりて家僕と
せりりて尋求しとて更小音問をきりて日もた暮るんとてまじりて家小飯

雪譜卷之四

又法中裁

りありのより母小語りけりて心得ぬること心あきりの処かて人走
らせり尋せけりふそ在家さふ志とび其夜四更の頃ふりてまじり主人小飯
らば此事近隣小聞え人集り種々小評議して居るをり一老夫妻来
てりあうあうの又えぬぬと我心あきりのさあるゆゑあせすまんとて来
きりとのふまへてあきりてときて主人の妻大おとらび子どのらまともぐり小
言語をそりてまぐれをのびの仔細をさし給けりて老夫いふやうとまじり今朝
西山の嶺半小きからんとき一時そのあう小行逢何方とさうけりて稲倉村
行とて行過るひぬ我ハ宿飯り足めて遙小行過る頃例の雪類の音をきりて
るるるびらの山とんと嶺を无事小通りてまじりてあきりてあきりてあきりて
无難小行過るひや万一なるまじり逢ひてあきりてと案ホつて宿へ入りぬ今小飯
りぬぬぬぬやあきりてあきりてあきりてあきりてあきりてあきりてあきりて
しりりも案小さひて顔見あきりてあきりてあきりてあきりてあきりてあきりて

かく世息ハ布子を脱て父の死骸小腕をそとく涙をぐらふつとて資負んとまら時さい
 せん走りたる者ども戸板むろろむど擔げ用意なる一きり妻がゆらたる首をも
 めきうとふそとくかさげたる人々前後ふつきをひつ子らハ哭くあふつきとく飯り
 けるとぞ此ものぐらハ牧之が若り一時その事ふあづりたる人のかたより一まをを
 せりてまのまあびる命をうらひ一人猶多りまこころをふ家をわ
 つぎ一もあけき其埽さうんこう一かの死骸の頭と腕の断離するふとまふ
 うとて磨断まらる

○ 寺の雪類

あふと六敢て山あもりまらび形状峯をうら一なる処ハ時とてるるあり文化の
 せどめ思川村天昌寺の任職執中和尚ハ牧之が伯父と仲冬のを多此人居間の二階
 あり書案ふよりて物を書てをらまら窓の庇ふ下りたる垂氷の五六尺あるが明りふ
 障りて机のやうり暗きゆ家家の擔ふらて家僕が雪をゆんととららあきたる木鋤を

農夫頓智借雜圖



京水筆

とりのつらさを打をうんとて一打うちけるふ此ひきあやありけん

里言ふつらさをうんとて打り
りたるふとい古言あまふ

本堂不積る雪の片屋根石くとうごまうち土蔵のやとり不清水がりの池あり

ふ和尚のまじふ押落さる池ふ入るまじをうごまこの勢ひふ身ハ手鞠のごとく池をま

まじてえて掘揚る雪ふ半身を埋めるとあたまけびるころふ庫裏の雪をかり

ぬるまのづら馳きり持る木鋤あま和尚を掘いごけまバ和尚大ふ笑ひ身うち

をつるふ聊も疲うけむ耳ふ掛る目鏡さつがうく不思議の命をまをりぬひぬ

此時七十余の老僧ご前ふり何村の人の不幸ふ比ま六万死ふ一生をえるとる

天幸といひつる齡も八十余ま元病ふく文政のまふ遷化せるとま平日余ふ

示していひま我雪類ふ撞くと死筆を採りて居りり尊き佛經あり

ゆ急たごまやハと一字毎ふ念佛中て書居りありふ雪類ふ死まをり不思議

ふ命助りり一字念佛の功德あやありけんまま常人ハ常ふ神佛を信心し

悪事災難を免とん子をいのご神佛を信むる心の中より悪心ハらぬもの

悪心の元々災難をのりて第一ことをしへらまき今も猶耳小残り人智を尽して
のちをうらざる大難ふあふ因果のあきらむる処ある人あつたりありごと
人家の雪類も家を潰せし軍人の死するごとあま見聞あまざるものさ
としてあまざる

○玉山翁が雪の圖

またのとー玉山翁が梓行せし軍物語の画本の中ふ越後の雪中ふた
うひーとの圖あり文も深雪とありてあまも十二月のころふあつたる軍兵
とのが奉止をえさふ雪ハ浅く見ゆ越後の雪中馬足ハ雪が深くゆある小農人も雪中
牛馬を用ひざるや軍馬をあるを馬上の戦ひあま
雪あまた国の人の画作るま雪の实地をあるとて越後雪中の真景も甚しくた
づりあまーるる画ゆハ虚もまじらざるそのさぬありてあまあまけさあま
がひいま玉山の玉小瑾あ人も惜けまかて書通の交りあまらせく牧之が描き
筆めて雪の真景種々寫し猶常ふる真景もぐる春の半まきく三国

嶺ふちりた法師嶺のふとふ在る温泉ふ旅りそのあまの雪を見つるふ高
峯よりあまーるる雪ころ五七間やある四角或ハ三角ある雪の長さハ三十
間もあまんとあま谷ふとあま上ふるや幾つとあま大小もあまーるる
雪国ふらまきする目ゆえその奇觀ことあま尽しごとあまの真景をも其座
ふうらーるるを添て贈りし玉山翁が返書ふ北越の雪我が机上ふりか
がごとく目をあまらりいごとあまの圖をあま多くあまめ文を添さを私筆する
例の繪本とあまーるる其書雪の霏くごとく諸国ハ降さんや我が筆下ふ
在りとあまらる書翰今猶牧之が書笈ふをあり此書あまらるる黄なる泉
小玉山を沈へ惜ア
○越後縮
あまの文字普通の俗用ふあま又あま訓あま

縮ハ越後の名産ふとあまーるる世の知る処あま他国の入ハ越後一国の産物と
あまのあまらるるわ我住魚沼那一郡ふあまらるる産物と他所ふ出るもあま

僅中々其品魚沼比（比）縮と唱（唱）の近來（近來）のりてむりハ
 此国（此国）ふても布（布）とのりり布ハ終（終）て織（織）る物の総名（総名）るまばるる一（一）今も我があ
 たりゆき老女（老女）と今白（白）ハ布を市（市）ふりてめけるごとくふりひく古言（古言）ものことり東
 鑑（鑑）を案（案）るふ建久三士子の年勅使（勅使）飯落（飯落）の時鎌倉殿（鎌倉殿）より餞別（餞別）のりるをりる條
 小越布（小越布）千端（千端）とあり猶（猶）古死（古死）ものゆもえひけきとさのふ索（索）を後のものゆ（ゆ）空
 町殿（町殿）の營中（營中）のりるものを記録（記録）せしとる伊勢家の書（書）ゆ越後布（越後布）とのりるのりま
 と見えたりさきむりより縮（縮）ハ此国の名産（名産）なりとるあきさけ一愚業（愚業）ふむ
 りの越後布（越後布）ハ布の上品（上品）る物なりとるを後と次第（次第）小工（小工）を添（添）て糸（糸）小縷（小縷）をつよ
 くわけて汗（汗）を凌（凌）ぐ為（為）小縷（小縷）せ織（織）するゆもふ小縷布（小縷布）といひとるをさきとち
 るこのりひつらん欲（欲）かくて年歴（年歴）るやふ小縷工（小縷工）ふりて地（地）を美（美）くせんとして今の如
 ちとる名のり残りり一（一）時（時）小（小）かひひとるるふ今ハ物
 の模様（模様）を織（織）るやと錦（錦）をちる機作（機作）ゆとるをさきとち劣（劣）むりやうるむつりさ模

雲譜卷之中

様をもり縷（縷）も飛白（飛白）も甚上手（甚上手）ふるり種（種）の奇工（奇工）をいせり機織（機織）婦人
 とらの伶俐（伶俐）なりとる故（故）とる

○縮の種類

魚沼郡の内ゆ縮をいせ事一様（一様）るる村（村）ふよりて出（出）毛（毛）品（品）ふさとありふ
 自らむりより其品（其品）小のり熟練（熟練）と他の品（品）小移（移）らざるゆと其所（其所）その品を
 産（産）む事左のごと

▲白縮ハ堀の内町在の村（堀の内）又浦佐組小出嶋組の村（小出嶋組）

▲模様（模様）るゆ或ハ飛白（飛白）りゆ藍錆（藍錆）とのり塩澤組の村（塩澤組）

▲藍綬（藍綬）ハ六日町組の村（六日町組）▲紅桔梗縷（紅桔梗縷）のり小千谷組の村（小千谷組）

▲浅黄縷（浅黄縷）のり六日町組の村（六日町組）又緝（緝）の弁慶縷（弁慶縷）ハ高柳郷（高柳郷）ふかぎとる右

りゆも魚沼一郡（魚沼一郡）の村（村）と此餘（此餘）ちをいせ所二三ヶ村（二三ヶ村）ありと専（専）らふせとる
 志（志）ばるる舎（舎）てあるさび縮（縮）ハ右村里（右村里）の婦女（婦女）らゆ雪中（雪中）小籠（小籠）り居（居）る間（間）の手業（手業）と

かよそへ来^ら年^{ねん}賣^うびぎちをむと一の十月より糸をうとをどめ次^{つぎ}の年二月
ろづ小^せ晒^ひをいろ白^{しろ}縮^{ちぢ}らうちなる所^{ところ}ハかりまきたうるまはさ人^{ひと}ハ丈^{あや}あるものやど
中^{ちゆう}ハものささども手^て練^{ねん}はうくあるもの之^{これ}材^ま材^{ざい}の婦^ふ女^{にょ}さうがちぢも小^せ丹^に精^{せい}を尽^{つく}
をりまうく小^せ冊^{さふ}ハ尽^{つく}て其^{その}あうまを下^{くだ}小^せ記^きせり

○ 紵

縮^{ちぢ}小^せ用^{もち}る紵^をハ奥^{おく}の會^{かい}津^{しん}出^で羽^う最^{さい}上^{じやう}の産^{えん}を用^{もち}ふ白^{しろ}縮^{ちぢ}ハものさう會^{かい}津^{しん}を用^{もち}ふ
ろんづく影^{かげ}紵^をといふもの極^{ごく}品^{ひん}まも米^{まい}澤^{ざい}の撰^{えん}紵^をと拵^{ちぢ}まるも上^{じやう}品^{ひん}之^{これ}越^こ後^ごの
紵^を商人^{しやうじん}の国^{くに}といひて紵^ををりてて國^{くに}の賣^うる紵^をを此^{こゝ}國^{くに}也^{なり}もそといふ
古^こ言^{げん}之^{これ}麻^{あさ}を古^こ言^{げん}ふとといひハ綜^{そう}麻^まのるぬ之^{これ}麻^{あさ}も紵^をも字^じ美^みハちぢく布^{ぬの}小^せ
織^あべき料^{りやう}の糸^{いと}をいふ之^{これ}紵^をを学^{まな}小^せ作^{つく}る俗^{ぞく}也^{なり}と字^じ書^{しょ}小^せハええり

○ 紵績

余^よ一^{いつ}年^{ねん}江^え戸^と小^せ旅^{りよ}宿^{しゆく}せ一^{いつ}頃^{ころ}或^{ある}人^{ひと}の言^{こと}ハ縮^{ちぢ}小^せ用^{もち}る紵^を績^うぬ其^{その}処^{ところ}の婦^ふ

人^{ひと}誘^いひあらせと一家^{いっか}小^せあつまりその家^{いへ}中^{ちゆう}用^{もち}る紵^を績^うぬ此^{こゝ}人^{ひと}はたぢ小^せその
家^{いへ}をめぐりて績^うぬと聞^きくといふといひきいなる人^{ひと}ぞか空^{そら}言^{こと}をいひあうけん
まりろろ魚^{うを}沼^{ぬま}一^{いつ}郡^{ぐん}も廣^{ひろ}きさうや右^{みぎ}やう小^せまる処^{ところ}もあるやんといひありともそ
下^{した}品^{ひん}のちぢも小^せ用^{もち}る紵^をのりろん下^{した}品^{ひん}の縮^{ちぢ}のりハ姑^{あや}舎^や論^{ろん}ぜハ中^{ちゆう}品^{ひん}以上^{いじやう}小^せ用^{もち}
るを績^うぬらうむ所^{ところ}の座^ざをささあむ體^{たい}を正^{ただ}しく呼^{こゝろ}吸^す小^せつきて手^てを動^{うご}せ
て為^な作^さをる是^{こゝろ}定^{ぢやう}座^ざ小^せ居^をハ假^{かり}小^せ居^をて其^{その}為^な作^さをるをさハのづらう心^{こゝろ}鎮^{ちん}むし
糸^{いと}小^せ太^た細^{さい}の糸^{いと}きて用^{もち}小^せなちぢて常^{つと}並^{なみ}の人の紵^を績^うぬ唾^{つば}液^{えき}を用^{もち}ふことと
ちぢの紵^を績^うぬハ茶^{ちや}碗^{わん}やうの物^{もの}小^せ水^{みづ}をさうらひくことをのらハ事^{こと}毎^{まい}小^せ鹽^{えん}ハ座^ざを
清^{きよ}めててまをるをあり

○ 縷綸

糸^{いと}小^せ作^さるゆも座^ざを定め體^{たい}を圍^{くわ}位^いるる績^うぬハ縷^{いと}綸^{ふん}その道^{みち}具^ぐその手^て術^{じゆつ}
その次^{つぎ}策^{さく}の順^{おん}その名^な小^せ呼^よ物^{ぶつ}許^あ多^た種^{しゆ}あり縷^{いと}綸^{ふん}の事^{こと}を詳^{つひ}小^せせんハちぢ

けき言ほどよくしるすもむよりかりをるまの手作とて雪中あり在
上品のん小用ある処の毛よりも細き糸を終兆舒疾してあつらひ雪中こも小籠り居る
天然の湿気を得ざる為難ガニ湿気あつらひを失な糸折るをまありをまとと
かより断るきあり是故小上品の糸をあつらひ強き火気を近付む時
より織るか後二月の半小ゆり暖気を得て雪中の湿気薄き時ハ大なる鉢そちで
の物小雪を盛て機の前小置その湿気をかりて織るつたもありてまのつた小付
て熟思小縷を織つた六蚕の絲由糸陽熱を好布を織あき六麻の糸由糸陰冷を好む
さて縷ハ寒小用ひまぬ温あつらひあつらひ布ハ暑小用て冷ひやあつらひ是ハ天然小陰陽の
氣運小属する所あるん件けんの如く雪中小糸とて雪中小織り雪水小洒ちぎ
雪上小晒さきを雪ありて縮ちぢありさま越後縮ハ雪と人と氣力相半めいさんと名産の
名あり魚沼郡の雪ハ縮の親おやとい蓋け薄雪の地小布の名産あるは
ハ糸の作り小よるつ越後縮小比ひと知るし也

雪譜卷之中

織婦

凡織物を専業とせる所ところハ織人を抱かかきて織かるを利と縮ちぢ小ちぢのくも
別小无な二国の名産なまも織婦おむすめを抱かかきかる家いあまいうんと
あまい縮ちぢを一端いちたん小ちぢるをて小人の手をて勞らうするて尽つがて手て間
小賃ちん錢せんを當て算量さんりやうするてああ雪中こ小籠居婦女等こもが手をて穿ちくてせざるの
の活業くわくごう之縮ちぢの糸いと四よ十じゆ縷りゆを一ひと升しやうといの上うへのちちハ經けい糸いと二十にじゆ升しやうより二十にじゆ三さん升しやうも
至る但たゞ一ひと炭すすめい二ふたをいちち通とほるて一ひと升しやうの糸いとハ十じゆ縷りゆ之布幅ぬのあし四方よしかた小縷りゆ糸いともここ
小随あまと併あはせい六む地ぢをいちちババ糸いとハ猶なほ多おほくくんんささ僅ひ一ひと尺せきああまりりを織かるこ小
も九こ百ひゃく二十にじゆ度ど手をて動うごかかるを以もて一端いちたんを二丈七尺にじやうしちせきとて二万四千四百八十四
度手をてをいちちううせせ六む端たんをいちちは其凡そのおほをいちちのを定さだめめとて三丈
績うをいちちむむより織からり晒さきああげて端たん小ちぢるをいちちの苦心くしん勞らう繁はんかかひひをいちちる
ちちのちちちのちちちのち織物あつらひハあまあ然ぜんんんが目前めいぜん小我こがが視みといちちるちちちのち

之かゝる縮を僅の價にて自在ト小着用チする俗ズク小の安ヤスいもの之縮をおる処トの之のハ
 娶ヨメをえらふハも縮の伎ヒカを第一ト容儀ヨウギハ次ツギとまスこのハ多タ小親コシするものハ娘の
 幼コより此コノ伎ヒカをテ手習テするを第一ト以テ十二三歳トより太布オホフをオりウるハ也ナト
 五六より二十四五歳までの女メ氣力キリキ盛シる頃ト小コおシるハ上品ウツンの縮ヒカハ機工キコウを好ヨク
 せバ老オシ小臨コリンでハ綺キ面メン小光澤コウサツありテ品ヒナ價ツ値チ々々でテ見ミるハ 貴重キウチュウの尊用ソウヨウハミテ
 之極品ゴクヒンの詭物ケイモノハ其品シヒン小能熟コノウジュクする上手ウツをえらビ何方ナニカタの誰タレと指サシ小コをシラ
 するハ也ナ多タそのハかカむム小コハシるハ也ナト各オノオノ伎ヒカをオ励オモむル之ノかカるハ辛苦シンクハ僅ヒナの價アハの
 為タメ小他人コタニ小コまるル辛苦シンク之唐タウの秦鞞シンギョウ玉タマが村女ムラメの詩ウタ小最恨モトメむハ年トシ々々金線キンセンをオ壓オシ
 て他人コタニの為タメ小嫁ヨメの衣裳イサウをオ作ツクるとシハシハシ宜ヨクるハ哉ヤ々々

○織婦の羨狂

ひらヒラせある村の娘ムスメをドめて上ウ々のちチをオあツくハらキ一ヒト也ナ大オホ小コよろシてハびビ金キン文モン
 を論ロンせバてハこノ小手際テをオせテ名ナをとシるハ也ナトシ績ウツをドめてハより人ヒトの

御機おんごころの靈威れいゐ織女おりひめ狂くるの圖



娘むすめの男おとこ

京水筆



手をかゝむえせいのひなを丹精の日敷を歴てへふるふ織あろかろろろろをさろろろやより母が持まきてり
 ときそ娘を中ちゆう見みて物ものをあけけるをもうちままんひひたたすまぶらふら
せふ女をどろるま煤まいらの暈まあるをまま母をままぬらゆせんらりやとろ縮ちぢを頼ふあてて
あ哭な倒たまけるがこまより發ま狂きやうとらりまぬぐの浪なみ言げんをのありて家内けいだいを狂ひまるる
あをえとろ兩りゆう親しん娘にやうが丹精たんせいしる心こころの内うちをあめひちりて哭なぬらたけり見みる人ひともあらまじり
あてまの袖そでをぬろろけるとど友とも人ひとるふがうぐのぐらりせり

○御機屋

貴重きちゆうせんよう専用の縮ちぢをあるふ家けの辺りふつのり雪をもその心こころに握まて住居まじり
 の内うちままるらけの焔えんの入りぬ明ありもよま二に間まをよろろ清きよめあらせるき進すすをあらまじり
 ちちろろるらるる四し方ほうふ注連しゆれんをひきこととその中央ちゆうおうふ機きを建る是を御機屋おんきやと唱とな
 て神かみの在ありごとろ衆尊しゆうそんひ織おり人ひとの外あ他た人ひとを入ますて織女おりをぬハ別火べつゐを食あへ御機き
 ふかる時ときハ衣服いふくをあらまじり塩しほ垢あか離りをとり鹽しほ漱すすぎことろろろ身みを清む日毎ひび

ふかくのごとく紅潮をいむるハ勿論之他の娘らをも今見誰との御機屋
を拜ふすのつらさやうふい之至極上手の女ふあふまふ此れをよを建てる
うけまバ他の婦女らごまを羨る比喩ハ階下ふありて昇殿の位をうま
かごご

○御機屋の靈威

神ハ敬ふふよりて威をままふ宜なる哉よりその物も守うとて敬ひ信
むまバ靈ある空しくび人のままふなる草鞋ふ衆人の信ぜふより
てのちくハ草鞋天王とて祭り一幸五難組ふをえりまうてや神々
を敬ハ靈威ある冥々の天道ハ人の知を以てをりあふまふ村の娘
例の御まやふありて心を澄しおまをかりて居りしふ傍の窓をわ
くと音あふのあり心ふまふおまあふ立よりてひまふふをこ
心を通る男をりし人目の関もありし心うとておまををい

家の後ふいり窓のゆふ立る男を將て木小屋ふ入ぬや娘の母飯り
來りおまやふ娘のをぬをえりいかりあふふその名をよびけむら
木小屋ふまうつけえ遠驚ハ男ハ逃奔り娘ハ心顛倒して身を織るも打
おまやふけりそのま御機ふより織んとあけるふ倏急仰向ふ倒し
落血を吐て絶入けり母此状態を見て大ふおま紅をうりて助け起
まづ御をまよりいごさめふいりしが氣息あるまて死し
いご父ハ同村のるふが家ふ在をよびく一医をま福ま薬をま
いごそのあふもろく両親いさうあふりよりをせよう一の娘の側
ふ在ておまごさごさ手束て死を俟のまあふふりの男來りま
耻らふさぬあふ人の後座一欲言とていりげ頭を低て涙をかうけり人
こまをまごさ同村の某が次男けり此男中へ膝をまめ娘の母ふ對ハ声を
ひとあふりやう今ハあふをうつて中へ我ハ娘御と二世の約束をま

のこさきのやど人のまきををくむせめてを誘ひにていふかん身のうりぬひ
こふかそき日まは逃まりくむせめてどかか災ありくと聞えつうく思ふ
穢しる身をまきて畏きかん穢ふかりぬひなる御罰あらんとまのて我
る罪ある人いあらばとも余処目ふえんはせらむをうく命をうけく契り
るこふも多ぐりくとちりうくむせめての命ふ代りて神ふ御罰を説らん
さるゆも此まきむくむせめてが死あらば我が命をまきていふをうく人
こそよれ証人のまことひつ赤裸ふりて髪をもまきた井ののふをあり奇
あつふ水を浴雪の上ふ躰居るふやん喝くけりけり時しも寒気肌
を貫くをりうく凍も死まきありさぬとあはまき人ともまて
そまこと知り實あもまきあつうく水を浴くけりけり神明の男
實心を憐れ人こののりをも納受すくけんる娘目の覚ふるまこと
あがり母をよびけまば娘奇異のかひをさくむせめての側ふあつまのいふ

とりの娘はくさやををくくふふやせとのふ母はうきくまののうりのひ
けまばもせめ御機ふよりいと賞えくかのあまげとのふ母はあまりの
うとまふかの男あもあせんまきふりつう立まりけんえをばりぬかて娘
四五日あるまきかやうて常並の身ふかりけり歳も十七あまはかひて筆をと思
ひをりるをりうくまきかの志のび男が實心ふ愛て早速媒の橋をこて
姻礼もめでてくとのひく程ゆく男子をまうけたり其家今猶榮の神の
御罰が夫婦の縁とありくも奇偶とのうてく我が幼うり一時の事とさ
筆のつゆふ記く御機屋の靈威あるまきをこくまきくむせめて
畏く慎むる

○縮を晒せ

晒屋とてまきをのまきとて又かりうか家あまきまきもあまきと掃りの
まきくやハその家の辺又程よれ所を見立とてふ假小屋を造り物を置

まこと休息きゅうぎの処ところとて晒人あびしハ男女ともうちまじり身みを清きよめり織女オリメの如ごとくま
 さうまハ正月あたらより二月中ふゆの為業わざ之此頃このころハしも田いも圃もも平一面ひらいつらめんの雪の上ゆきの上を
 こまこの上うへをさう一いち場ばとさるもあり日ひの内うちハさう一いち場ばを踏ふへ一いち方かた処ところ未まも
 手頃てごろの板いたハ柄えをつけ一いち方かた物ものめて雪の上ゆきの上を平ひらくふる一いち方かたくくせざまハ夜よ
 の間うちハ凍こへきえあま一いち方かた処ところのまま岩いわのごとくゆるゆるゆゆる晒場あびばハ一点いんの塵ちりも
 あらせざまハ白砂あらしまの塩濱あやのごとく一いちまえ白しろちぢみハかりあろ一いち方かたままをさう以餘よの
 ちぢみハ糸いとハほりり一いち方かたを扱うふりけてさうまその扱うハ細こき丸竹わだを三四尺さんじゆやとの弓
 ふらうてその弦つづハ糸いとをうけ扱うぎ一いち竿さへハうけとてさう一いち方かた白しろちぢみハ平地へいの
 雪の上ゆきの上ゆもさう一いち又また高さ三尺さんせきあまうり長さハ布ぬいやどふる一いち横幅よこはらハ勝手かたてハふまう
 せ土つち寺でらのやうハ雪ゆきゆもつらうその上うへハちぢみをのぞ一いち方かたままさう一いち方かたままあり
 う一いちせざまハ狗いぬやど踏越ふみこへちぢみちぢみをけがせゆもさう一いち方かた扱うをさう一いち方かたままさう
 こまその場所ばしよの便利べんりハあまうりゆも一定いつていありびまて晒あ一いち方かたハ縮ちぢふとあま系けい

雪中晒縮圖 此雪を干して
皆雪の上へ



○医師
雪舟
病家



あもあま一夜灰汁あくふ浸ひしあは明あけの朝幾度も水みづ洗あひ絞ぎりあげてまのどごとく
 さしをこ 貴重きちゆう専用の縮ちぢみをさしひいてまじりてあつぐくせび別わかふさし

場ばをのうけよろづふ心こころを用ひてさしをさす御機ごきをわすふ同おなく我國わがくにあまハ

地中ちちゆうの氷気こゑ雪ゆきのふあふ発動はつどうさるゆや雪中ゆきちゆう中央ちゆうおう雨あめままで春はるいことまじりてまじりてあ

件けんのどごとく目めふささしを晴はのつぐ事ことありさへ灰汁あくふひうてふささしをさす毎まい日にち

かろづるをさして幾日いくにちを歴へて白しろくをさしてさるのちまじりてさるやうにさしをさ

らんとまじり白しろちぢみをさしひをりり朝日あさひのあつくと昇ありて玉屑たまげ平へい上うへふ列りたる

水晶すいしゆう白布しろふふ紅映こうえいしる景色けしきのふたごころから光景あかりハ雪ゆきふまじりて暖国だんこく

の風雅ふうが人ひとふささしをさしひをさしひを晒あす種たねくの形かたち為なあまもまじりてあハ其

大畧たいりやくをさしひのまじり

○縮ちぢみの市いち

市場いちばとてちぢみの市いちあまふらりて堀ほりの内十日町うちじつまち小千谷せぢや塩澤しよざわの四よヶ所ところと

初市を里言ふまゝにさあれたる雪ぐとひの簾の明をのふ四月のちどめ有
堀の内よりをとりて次小千谷次十日町次塩澤いづれも三日づ間を置
てあり年小より右四ヶ所の外は市場多き十日町三都兵服向屋の定
宿あり編をくらふ買市日遠近の村より男女をいらせ所持のちと小名
所を記し一紙簽をつけく市場小持よりその品を買入ふくひてを賣買の直
段定ま鑑符をこころその日市をて金小換ふはんを半年あまり編のち
小辛苦くく此初市の為る編賣はさくく小那るもの人の憐をうこ
せ足を踏肩を磨万の品もろ小店をうま人物を賣遠く来りする
もの八宿をもちむもあま家毎人つどい香臭師の看物藥賣の弁舌人
の足をとめて錐を立べき形もあぬやう此初市の日八盤花の地の榮饒
あもをさく劣あつ右小の四度の市をうけのちも在くより毎日回屋来りてちと
十七日より翌年の初市あつ縮の精練の位を一番二番とひ價の高下あまを定
まを冬ちとる

雪譜卷之中

あまどもその年くふよりてあつづのちひあり市の日小その相場年の
氣運ふつきく自然ささる相場上げま三さんのちとこをん小のち二さん一
をん小位を前あもりくごくちとちと手間賃を論せざるものあま誰がかりする
ちと初市小何程小賣よりとちと年あがりよりちとをを登と一或は
その伎ふよりて要ふのちと娘もあま利を次ふく名を争ふあ
ゆふ市ふちとを持や兵士の戦場ふちととさてちと相場の大
やう穀相場ふちとと事ハ前後を年凶をま穀ハ上り縮ハ下る年
豊るま縮ハ上り穀ハ下る豊凶の万物小係る事此一を以て知く一さま
万民豊年をいのちとあや

〇あふら

我塩澤の方言ふらふらとく雪類ふ似くあつぬるもの十二月の前後
あるもの高山の雪深く積りて凍る上へ猶雪ふり降り重り時の氣

運ふよりてはいさむらふて休くくまの山の頂の大木ふつりく雪風をの爲ふ
一塊り枝よりかりく山の峰不随ひく轉び下りもろびき雪を丸て次
第ふ大をさへ幾万斤の重きをうつるもの幾丈の大石を轉し走ごとく
こまが爲ふあはくりは雪かきせしき雪の洪波をすく大木を根ごとく
大石をもかき一人家をもち潰さるる事あり此時ハころび暴風
雪を吹きさらし凍雲空ふ布て白昼も立地は暗夜とある事雪類ふあらす
ろまへ前あはりごとくをこみそのまもあまをまてあめまじど此
ゆかりはあまをまて落下るる不意をうもて逃れんとそまは軟る雪
深くて走りかたり十人中一人助ふ稀に幾十丈の雪人力を以て擔ふ
あまがまは三四月ふらり雪消てのち死骸をす事ありゆかりを処ふより
てをわて。こや。あま。おはし。ともりの山家あはるるをゆかりを避んとあり
其災るに地理をえりて家を作るゆかりに村をうつあまを奇談とこり聞

雪譜卷之中

ころりあまこしわまじどろりあまげまあまじど

○雪中花水祝ひ

魚沼那の内宇賀地の郷堀の内鎮守宇賀地の神社は本社八幡宮之上吉
より立せあまこしわまじどろりあまげまあまじどろりあまげまあまじど
処より神主官氏の家小貞和文明の頃の記録今小存せり當主ハ文雅を好
吟詠ゆも富り雅名を正樹といふ余も同好を以て交を修む幣下と唱ふ社家
も諸方小あまこしわまじどろりあまげまあまじどろりあまげまあまじど
ゆも神勅とて堀小水を賜ふことを花水祝ひといふ毎年正月十五日の神更に
新婚ありつる家毎小神使をのりて多門かびき時ハ早朝よりして黄昏ふゆる
時もあり友人嘿齋翁曰堀の内の人花水祝ひといふ事ハ淡路宮瑞井の井中
多蓮花の落る祥ありし頃の日本紀ふええさるる瀛觴とて花水の号とふ
起立あまこしわまじどろりあまげまあまじどろりあまげまあまじど

當日新替ありつる家小神使より言人ハ百姓の内回家門地の輩神使を務む
家定めありその中ゆく服忌はさうと寡る者家内小病人ありの縁類不祥
ありしもの皆除くしきうも家内小故障あり平安無事なる者を摺び神使の前
の朝神立沐浴有戒一存服をつけく本社小昇りえらびる人の名を志し
て御圖小わけ神慮小任て神使と以神使小當りする人潔斎して役を勤む是
を大夫との嘿奇翁曰くをさうり浄行さて當日正月神使本社を出るその行
装ハ先狭箱二本道具臺笠立傘弓二張薙刀神使侍烏帽子素襖次小太
刀持長柄持傘さうかろ供侍二人草履取跡鎗一本こまらの品を神庫小次小氏
子の人々大勢麻上下ゆて随ふかろ行装ゆく新替の家小ゆるゆゑその以
前雪中の道を作り雪ゆて山さりのやうなる所ハ雪を石壇のやうにつくり或は
雪ゆく棧えんききめく処を作りて見物のたよりと以てまうもあまの一人夫を
費つひさうりてさうりその家ゆへ家内をよりく清めとまて其日正殿の間とさうり

雲詣巻之中

一間ハ塩垢離しほごりふきよめを神使の席と一縁筵を布る之上座小毛氈をまき上
段の間小表り刀掛をおく次の間ハ親族ハさうとまてき人より祝美のちり物
をさうりかく鳴臺さう賀詠をさうりさうりかのかさめぐ之門ハ幕をうちよれやど
の処を志がりあげてさうり猫脱の壇をたて玄関式臺小准ふ家内ものりつとも衣服
をあらうも神使をさうり神使ゆるとまけハ親あるものハ親子麻上下ゆく地上小出て
神使をむらふ神使のさうりよりさうりせさうりて跋扈より大声ゆて正一位三社宮
使者と大呼神使を見て亭主地上小平伏一神使を引てさうり正殿小座さうりむ
行列ハ家の左右小ありて隊をさうりて神使ハ烟盒茶吸物膳部をいさう一數献
をさうりむあうさうり壺小盃をさうり三方肴をさうりむ献酬七献をかきさうり盃ごさうり
祝美の小謡をさうり事終りて神使を他小新婿あり家あり又到り式前
のごとく此神使ハちの花水を賜ふ事を神より氏子ハ告めふの使神使社頭ハ飯
立より個肴の神使社内ハ飯りてをさうり踊りの行列を繰いさうり一番小傘才錦

のころひねをうけ旋まわり端はしに鈴すずをつけ又裁き縫ぬいの物さあぐりるをさげる傘かさの上
 小八諫鼓こはかんこを飾かざることを持もつもの二人紫むらさちりめんちりめんで頬ほをつつとてむきひとまかろド
 紅絞べにぢのものを片かた禪ぜん禪ぜんふかろ嘿くわい存ま白しろまぐろ祭まつり礼れい小用せうようある傘かさ子こといふ物ものハ古ふるハ
 羽葆うはぼう蓋がいの字じを訓とり所謂しゆゑ織オリ小せとととと神かみ輿こ鳳ほう輦ふんを覆おほひ奉ほうずるぎ錦にしん蓋がい之
 ととりり猶なほ説せつありりが長ながけまきま省せうくくききて二にむんむん小假面せうめんをあてて細こ女に小扮せうばんする
 者もの一人ひとり帯おびのさたた小紙こがみ小女こに門かどを多おほくくつつけけかかでで次つぎ小こままも假面せうめん小
 て猿田彦さるひこ小扮せうばんするもの一人麻あしああくく作つくりりるる纓帽えいぼうやうの物ものを冠かぶり手て拵ぎうのさ
 ききを赤あかくくくく男おとこ根ね小表示せうひょうじするをううぐぐ三さんむんむん小法服せうぽくを美びくくくくかかぎぎりりたる
 山伏さんぶつ螺らをあくく四よむんむん小小児せうじの敬言けいご固かためめひひくく身みをあぎぎりりて随まりり次つぎ小大人せうだいじんの警けい
 固こ麻あし上下じやうげ杖つゑを持もつて非ひ常じやうじやうをしままむ五ごむんむん小踊おどりの者もの大勢たいせい花はなやうやうるる浴衣ゆかり小正月こしょうげつ
 人勢あひせい小熱あつ色いろある細帯こほおびをまりり群行むねり里言りげん小こままをごううのえんああううのふててハ降臨かうりん
 象ぞうのまりり皇孫こうそん日向ひなたの高千穂たかちほの峯たかね小天降あめふりりりのひりり小縁こゑんるの心こころをしんと嘿くわい

花水祝浴水畧圖



堀の内驛花水祝ひ
 噪劇の図原本の
 草画を此小載て
 別小至細の圖と
 示さるものハ

梓刺の旁と
 省子有り

梅もききまむと
 この市や堂も
 水を祝ひ

堀の内を

山東廣亭

鈴木牧之画



翁うやせうの指説さしごとありーづをぶくさへ壻おこの方かたまで此こゝをどり場ばをもりながらのまゝ可べ
 まうけかきあへてーんおん建たをーんおんあへてーんおん手桶てづく二ふ水みづをくしと松葉まつばと
 昆布こんぶとを水引みづひきくむきびつけむろの上うへふおき銚子しやうし盃さかをどく水取みづととて
 壻おこ水みづをあぶる者もの二人ふたり副取ふととふもの二人ふたりあへてなまきいさひまゝーげふ
 りでろむさへやうこ細帯こさいめてをどりのまゝるをすつをどり家いへふちあけま行列ぎやうぎやう
 ひろろ踊おど人ひとあむろのめづるふむろてうこむつをどるその唱うた哥うたふ
 「めぞう」の若松わかしさぬハ枝えだも榮さかゆる葉はも茂さかる「まんやめぞ」の花水はなみづえんやせあり
 あびせん我己夫がせ夫る男ふをりろくあやうぐをりえてうこむをどる事こと慣なるを踊おどの
 けいごかの水みづとろりもその程ほどを見みる壻おこ水みづ三さん献けんを祝いわせろの手桶てづくの水みづを二人ふたりて
 左右さゆうより壻おこの頭かぶへ滝たきのごとくあぶせかゝるさまを見みる衆人しゆじん拵てま躍うらてめぞ
 と賀いわふむてふそのまゝ日ひがらみみをせ入りこ入こりてをどりう
 とあまや七八ふ遍へんあへてどろくと立たまり再またびまづめのごとく列ぎやうをまゝく他の

晉の家小い事。事々々もをどり、痛後の家さへいふとあるのいふ入
 りてをどりありく、田舎いものを視る、まきさるまきさる此日、遠近の老若男女
 あまをいんとて、鏡のごとくありありか、そのまて、熱果まら、筆下小
 尽しが、○按る小晉小水を、漢ぐ事、ハ男の、陽火小女の、阴の水をあま
 て子をあま、その呪事、あて妻の火を、雷とて、祝事、此事室町殿の
 頃武家の俗習より、か、りて農商も、さ小倣ひ、中行り、事、物小を
 貝原先生の歳時記、ゆ、松永、江戸ゆ、ハ宝永の頃、ま、世上一同、正月十五日の
 事と、祝儀の、や、ふりて、大、小、流行、ゆ、多、晉小、恨、あ、者、事、を、水、程、ひ、
 よ、ま、さ、さ、ぬ、ぐ、の、狼、籍、を、ま、も、人、も、ま、あ、り、て、人、の、死、亡、ふ、も、ま、び、り、る、ま、
 う、り、ゆ、多、正、徳、の、頃、国、禁、あ、り、て、事、絶、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、
 小の、小、見、え、り、国初以来の事、記、る、宮本元禄、件、の、花、水、程、ひ、ハ、神、秘、と、有、ハ、
中を、さ、り、ふ、へ、る、人、の、老、て、の、作、り、 別、小、ゆ、ま、り、も、あ、り、と、雪、の、つ、い、て、ふ、その、大、畧、を、記、て、好、古、家

雪譜巻之中

の談柄小具、さ、り、の、

○菱山の奇事

越後の頸城郡松の山ハ一庄の、総名、ゆ、許、多、の、村、落、を、併、合、さ、る、大、庄、と、い、ふ、
 も、山、間、の、村、落、ゆ、て、一、村、の、内、と、い、ども、平、地、さ、り、松、代、と、い、ふ、所、の、も、平、地、小、
て、農、家、軒、を、連、ね、外、百、番、の、謠、ふ、を、え、り、 松、山、鏡、と、い、ふ、此、地、と、その、う、ま、い、あ、る、
 鏡、が、池、の、古、跡、も、さ、り、あ、り、今、ハ、池、も、あ、り、ぬ、や、う、小、埋、ま、さ、り、と、その、跡、と、く、の、ま、
 ま、り、按、る、小、松、山、か、さ、り、の、う、ま、い、ハ、鏡、破、の、繪、巻、と、い、ふ、の、を、原、と、て、作、さ、り、さ、り、
 ん、此、ま、事、終、ゆ、も、右、の、松、の、山、の、事、見、え、り、さ、り、松、の、山、の、庄、内、小、菱、山、と、い、ふ、あり、
 山、の、形、三、角、さ、り、ゆ、多、の、名、さ、り、さ、り、山、小、ち、う、た、地、小、須、川、村、川、小、と、い、ふ、と、
名、づ、く、 當、蒲、村、と、
 い、ふ、あり、此、ハ、山、毎、年、二、月、ふ、入、り、夜、中、ふ、か、ぎ、り、て、雪、顔、あり、其、ひ、さ、二、三、里、小、
 聞、ゆ、傳、て、い、ふ、白、髪、白、衣、の、老、翁、幣、を、の、り、て、さ、り、さ、り、小、乘、り、下、り、と、い、ふ、ま、り、此、
 う、ま、い、須、川、村、の、方、ハ、二、十、町、余、の、地、真、直、小、突、下、を、年、ハ、豊、作、と、當、蒲、村、の、方、ハ、

斜小でいふ年山作之其驗少も違ふ事なり一年の豊凶雪頼小係る事此山小
の之限るも一奇事とのいふ

固小い余が旧友出雲崎小住丸山氏の家祖父ハ博学の聞えあり一入ありき
余二十年前丸山氏の家小遊第をくめ一時祖父が宝曆の頃の著述とて越

後名寄とのい書をいせし一三百卷自筆の寫本之各寄とのいとて越後
の風土記なり一國の神社佛閣名所旧跡山川地理人物国産薬品の類すべて
部を分圖をいごとて通曉しゆきくある精撰之此書小右菱山の説も粗々い

どきのといとて引も菱山のいをいふつぎく此書の事をいひいせしは精撰
大成の書も空しく秘笈小ありて世小あきまざるが惜けいふふり

○秋山の古風

信濃と越後の国境小秋山とのい処あり大秋山村とのいを根えとて十五ヶ村を
るべし秋山といふと秋山の中央小中津川とのいありて

雪譜卷之中

文溪堂藏

西小十五ヶ村あり東の方小在る村ハ
●三倉村人家
●中の平村軒
●大赤澤村軒
●天酒村軒
●小赤澤村八軒
●中の原軒

●和山軒西小あり村
●下結束村軒
●逆巻村軒
●上結束村九軒
●前倉村軒
●天秋山村

●屋敷村十九軒
●湯本あり温泉此地東小苗場山天小聳えとて連岳とていふき西小赤

倉の高嶺雲を凌て衆山とていふ双ぶ清水川原ハ越後の入り口湯本の信濃小越の
嶮路ありとのい一夫是を守まば万卒も越え難き山間幽避の地之里俗の傳ハ此地ハ

大むり平家の人の隠る所といふ牧之謂り鎮守府將軍平の惟茂四代の后
胤奥山太郎の孫城の鬼九郎資国が嫡男城の太郎資長の代まで越後高田の辺

鳥坂山小城を構一國小威を震ひ一謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐木
三郎兵衛入道西念とていふ戦ひ終小落城せり此時貴族の落人なるの此

秋山小隠るる一里俗の傳ハ平氏とのいなるもよあるふ似たり此秋山

史古の風俗かのづらう残りりと聞ゆ多一度の尋ねるとおもひ居りし此地を
よくありし業内者を得たりしゆ多偶然かひこち業内が教ふまうせ朱味
増曾油鯉節茶蠟燭までを用意して従者ふもせと立どりて文政
十一年九月八日の事ありたその日秋山ふ近き見玉村の不動院ふ宿次の日
桃源を尋ねる心地して秋山ふふ入りぬき入り口清水川原とのありて
ふいふんとする道の傍ふ丸木の柱を建注連を引くこと中央ふ高札ありし
る事ぞと立下りてまじり小童のふてくるやうのいろは文字めて「わがそのあひむ
うこののいこまよりいまは」トあせり業内曰秋山の人ハ宛瘡をかてる事
死をかてるが如しゆんとするまじりゆきさうさうするものありて我子といふも
家不居せむ山ふ假小屋を作りて入るむき喰物をまじりやうのまじり
錢あるもの八里より山伏をいふて祈らまもありまじり九人ふて十人の死を
る此ゆふ秋山の人他所ゆきとさうさうありとまじり何事の用をも捨て

雪譜卷之中

逃るることまじり此地ゆへ宛瘡する者甚と稀と十年ふ一人あるなりと語り
まじり清水川原の村ふいふりふ家二軒あり又此の作りまじり他所ふりまじりまじり
ふやまじり立中ふてまじりまじり猿飛橋を見玉とて業内前立とゆふ此
秋山の道はまじり所の人のまじりまじりまじりまじり道まじり牛馬まじりまじり
まじり所まじりまじりまじり道狭く小径まじり深くしてやうく道をまじりまじり
まじりかてうの中津川の岸ふいまじり岸の對ひ逆巻村ふいまじり所ふ橋あり猿
飛橋とのふ橋のまじりをまじりまじりまじりまじり翼まじりまじりまじりまじり
絶壁まじり屏風をまじりまじりまじりまじりまじり岸より一丈まじり下ふ西岸よりまじり
まじりまじり岩の鼻ありまじりまじりまじりまじりまじり橋を架くまじりまじりまじり
橋をまじりまじりまじりまじりまじりまじり丸木を二本まじりまじり細木を藤蔓まじりまじり
渡りハ二十間まじり橋の廣さハ三尺まじりまじりまじり欄杆ハまじりまじり作らまじり橋を渡りて
對ひの岸ふ藤綱を岸の大木まじりまじりまじりまじりまじり下げまじりまじりまじりまじり

とせしむるさ危けまば芭蕉の蝶も居直る笠の上としひ木曾の棧中をさ
く劣む此橋を渡るゆやといふ案内がひく今日此岸のつぎ東の村を
又玉ひく小赤倉村のつぎ玉の程よき道ありて小赤倉の知る人もあはば宿
をゆきしむる橋をこしむる心むつぎ若ふりて墨斗とりい
橋を寫しむるて四辺をふりて行雁峯を越て雪小字をのりて走様指をつ
くひく水小画を寫し奇樹崖小横よりて竜の眠る如く怪岩途を塞ぎて席
の即ふ儀より山林の遠く深き錦を布き礫水ハ深く激しく藍を流せり金
壁双び緑山連りてさぬ画ゆもあはば光景の目りせせむるまをひく
農夫二人きりかのかく衆を資負くろの橋をこしんとて岸ふりて
とせむの橋を石壇のごくあはば橋をゆく事平地のごくその半ふりて
橋揺くとて危きやういふるも又ふさ身の毛いもあはば
うの藤綱ふりて岸ふりて岸ふりて猿のごくをりて人のこころをさ目

雪譜卷之中

を新ふせりさそをを太く例の細道をさぐり高小のわり低小下りよやどの途
をへくやうやく三倉村のいさよりて中人家三軒あり今朝見玉村より用意より
弁當をひくちやとあはば入りて老女よりちあはばといひつ木の盤の上小長
き草をまき木櫛のやうものゆき撲て解分るさぬといふものゆき何ふさ
と岡ハ山ふあはばといふ草をまき茶を煮ふてあはば衣を作るといりあはば衣といふ
名のめづりけまば強きうづゆけまば老女といひてさぬ案内がひくよりあは
衣といふ婆ごの著るあはばといふ茶をまき帯布のやうものを袖なり羽織の
やうふあはば物之茶をまきひけまば老女果てさぬ疱瘡の事を問ふ案内がひく我ふ
塩澤より秋山をまきさるりものさあはば去年此うさうさういふ
老女のくうり内りの今半ハ井戸蛙のやうふさるりんぐ里ハ一度も出らん
ごといひつてさぬ茶をまき煤を煮てさるやうさる別小白湯をのりて
て喰しをりつて此住居をまき小礎もまき掘立る柱小貫を藤蔓

縛りつけ管をあらはけ壁と一つ小窓あり戸は大木の皮の一枚をひいて横
 木をまじり藤蔓あつく一とあり園もあくて扉と茅葺のいりも矮屋にて
 りりそあふ作りし草屋など里地より雪はあつらんといひバカハ強く作りし
 ろのへ一家内をえまじり稿進のちさきつるをまきつる一ひ稲皮のてまの取あましくふとや
 納戸も戸棚もろくろ管縄あつたりつる棚あるものと囲炉裏ハ五尺あり深
 さハ灰まを二尺もあるが薪多き所あつて大火を焼くゆ多し家ふちくものハ
 木鉢の大方ハ三ツ四ツあり所中作りゆ多し薬罐土瓶雷盆などいづれの家あも
 る一秋山の人家まじりこまふかろ今日秋山ふ入りしふいりて家を五ツ尺
 栗稗を刈てむらりまじり家小居る男をえまきそむひうち枋の實をひ
 ろひく山よりかりし娘をえり小髪ハ油気もあつてまろめつる細るを符
 ちて結ひるびり手拭ひやく頭巻をり木綿給の垢つきるが常るまより一尺
 ももろくまふ巾二寸をりのゆめん帯をうろふむまじり女のすくまはまるとかひの帯
 のせまは古画あまきこえ

雪譜卷之中

廿四

文漢堂藏

えくる古風なまきり風のしど 秋山の女まじりかくの如し老女ふ土地の風俗などいづれ一が心
 にくるまじりたりのまきり 秋山の女まじりかくの如し老女ふ土地の風俗などいづれ一が心
 くれはまじりまきりまきり物をとくせくやでまきりけり ○かくて中の平村九軒
 天酒村軒ニ大赤澤村軒を歴る道なる嶮き山行して此日申の下刺やうく小赤澤上
 けりぬらぬ人家北八軒ありて秋山の中ニヶ所の大村之上結東ハ此村ふ市在門とて
 村中第一の大家あり幸ひ案内者の知る人まじり宿をりてあたし入りてるふ四間
 ふ六間ほどの住居主人夫婦ハ老人也長男ハ北七八次小娘三人あり奥の方ふ四
 畳をりの一間ありてゆまじり稿進をまきりあり 古画あまきこえまきり古風あり
 勝手の方ハ日用の器あまきりちりりるまきりふちも木鉢三ツ四ツあり囲炉
 裏ハまきの大きき深きのをまきり用意ある米味噌をとりて今日朝清水河原村ふ
 てりらまきり舞草ふらこの芋などとりて案内料理まきり雷盆をとりハ末
 の娘ハ棚のまきりよりとりてまきりまきり常ゆつるまきりまきりけりるあり
 のちふまきりハ此秋山ふまきりまきりのあつて此家と此本家のまきりまきり此地ゆて近年豆を

作りもどめく味噌をもつて豆でも麴を入るをせだね汁小まるとなをりたる
ゆきるとどまて此家の中も別小竈ハ多くあるがそのものを煮るにやて夜もよき
バ姫小松を細く割るを燈とを先り一室をてつて蠟燭もまたとり案内が調
よるものところね碗小ゆり山折敷小を多きゆいせりあるとらゆりて芋と蕪菜
を味噌汁小をさるるゆりゆりきものあり案内がさし心えそゆりやうと秋山の名
物の豆腐ととの小豆を挽きゆいせり糟を兩さるゆ味も喰をりて後あつた
茶の間の旦那秋山のてふ人を教へて茶の間の旦那とどつゆり小入らむとのふ此ことを
さしてぐくつて案内小間ハ居風呂小入り玉とのふゆきをさるるをどつゆり又ハ居り
湯ともゆり秋山小を多き桶をゆりハ此家と此本家とをりて此地の人とまうハ冬も
とゆりあろ小入りゆつゆりゆりゆり道のつらきもゆきとさるるゆりて元の炉の
横座小飯りゆりゆりゆりゆり上座ともゆりゆりゆり銅鑪もありゆりて用意の茶を從者
が煮火するを喫野する菓子をりの三人の娘ゆりゆりせりゆり三人が小腰ゆりて箕居

雪譜巻之口

足を灰のゆりゆり入珍ゆりゆりを喰ふゆりゆり柱ゆりゆり木を惜気もゆり
焼ゆりゆり火影小照をゆりゆり末のむゆりゆり色黒く肥太りて醜ゆりゆり裾をま
ゆりあゆゆり虫をゆりゆりゆりゆりけきと耻ゆりゆりさるるせだ二人の姉ハ色白くして玉成
双ゆり美人之菓子ゆりゆりを喰ゆりゆり頼ゆりゆりあゆりて打ゆりゆり面ゆりゆり愛形ハゆりゆり
之かゆり一雙の玉を秋山の田夫ゆりゆり妻小せんハ可憐琴を薪とゆり電を煮るゆりゆり主人ハ
里地の事をゆりゆり知りて話も分るゆりゆり所の風俗をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
あゆりゆりゆりゆりゆり記ゆりゆり○此地近年公税を聞ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
僅の貢をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり信濃と越後との他の村名王の支配をゆりゆりゆりゆりゆり
をも定めゆりゆり冬ハ雪二丈餘もつゆりゆり人のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
送るゆりゆりゆりゆりゆり此村小山田を氏とゆり助三郎とのゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆり黒駒太子と称する画軸ありゆりゆりゆりゆり死人の上を二三ばんゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆり私小葬る寺をさるるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
秋山ハ山田
と福原の

氏の名は右の助三郎、山田の徳本家の太子の画像といふ太子のやうな馬子のり
 て雲の中へあふまぬ地のより、いり牧之助三郎の家へいりての一軸をえんとて、正月七
 月のやうなまをいり ○此地の人上食ハ栗ハ稗ハ小豆をも交へ喰ふ下食ハ粟糠ハ稗
 乾菜をもまじへて喰ふ又朽の實を食ふ ○婚姻ハ秋山十五ヶ村をうきりに
 て他所へのりて婦人他所へ男をいりて親族不通にて再び面會せざるをむり
 よりの習せといひ ○秋山中ハ小寺院ハさう之庵室もみりハ幡の小社一ツあり寺の
 きやまきも無筆といふ心あるもの里より手本を得ていりは、いりてかゝる人
 をバ物議とて尊敬を ○山中ハ多牧ハ一牧屋をえりてのまき ○深山幽僻の
 地はさうハ番六のといり木綿をも生ぜざるも衣類ハ乞ひまじりてあふり ○山
 いりといふ草ありてその皮を製して麻ハ替へ用を為す ○公相がかういりて時牧之
 いらの形状をうりてくまざりてか后ハ栗ふいりといふ尋麻の事あるべし尋麻ハ
 本草ハいんて草の名ハ麻の字ハ熟しといふハ麻ハ替へも用ふまきものあふりま
 きど毒草のあふりていんて又山韭といふも同書ハいんてまきも麻のうりあふりま

雲譜巻之中

まきものいりてをいらといふ草の形状を聞きりていんてまきものあふりま
 人ハまきて冬も着るまきいんて嘗て夜具といふものや冬ハ終夜中ハ大火を
 してまきの傍ハ眠る甚寒ハいんて他所より稿をいんて作りまきいんて
 眠る妻ありてのいんてをひろく作りて夫婦ハいんて寝る ○秋山ハ夜具を持
 家ハ此翁の家といり一軒あるのいんてまきものいりて織つるいりてのいんてをいんて布
 子のまきいんて大なるいんて宿り客のいんてまきものいんてまきものをいんて
 せの所がわろく身もいんて ○稿ハいんていんてまきいんてまきいんて
 いんていんていんて ○人病ハいんて米の粥を喰せし薬と重き山伏をいんていんて
 氏ハいんていんて ○鏡を持て女秋山中ハ五人ありていんていんていんて
 鳥實温厚いんて人と争ふことあはれ色慾ハ薄く博奕をあはれ酒屋多けし酒
 のいんていんていんていんていんていんていんていんていんていんていんて
 境之 ○かくて次の日やうの稿といんていんていんていんていんていんていんていんていんていんて

西の村々をへて上結東村小宿り猿飛橋をこりてその日見玉村小宿りて家小かく
 どりきあぐ記をへきりあきども文多けまぶのせむ
秋山記行三巻を編りて家小蔵む ○朽の本字ハ
 實の食方翁小聞をこり記して凶年の心得とを朽の實ハ八月熟して落るをい
 ろひ煮てのち乾し手小接てあき篩小けて法皮をさり質小布をまきて粉小
 煮るをまきよくろく水をうちてあめらせまきする布小つこ水小ひこくく
 四五日小くそりひで絞りて水をさりて乾しあぐるその白き事雪のごとく是を
 粟稗あふまぜ又ハ朽むりも食とま又餅ゆもまると別種ありとを
 ふそのあぐ六朽小似よりとぞ ○此秋山ふるあし山村他国ふるもあるよりを聞
 しまぶ珍しく福とあぐくくするゆあたる記せり ○秋山の産物木鉢まげ物
 るの山をくまきげ縄板るの秋山小良材多しとのども村中をめぐり中津川屈曲
 深き所浅き所ありて筏をくぐり又ハ牛馬をつらぎまぶ良材を出しがごとく
 財をうる事難けまぶ天然の貧地と

秋山絶壁の圖



同棲飛橋の圖



牧之画

畏ふ入り之寐多國



京水筆

雲之堂の圖



○狐火

酉陽雜俎ゆうやうざう組くみ狐こ鬮う髒じやう髒じやうを戴いたき北きた斗とを拜まをし尾おしを撃うて火ひを出だすといりかの国くにハと
 もあま我われがまきくくすハあうらむとてハ下したふいへハ狐こハ寒さむをかそく物ものも我われ里さと
 りてハ冬ふゆハつる子こ稀まれハ春はるふいり雪ゆきのふりやまらるるつりり雪ゆき中ちゆう食くふらるる
 夜中よちゆう人家にやうがふちるるき物ものを竊ねそヒ喰くふり甚た悪あつむぐ人ひとこまを知しるゆゑらるる盗ぬすト
 とく人ひと智ちを以もつてまきかけどもまきくの間まふ奪うひ喰くふ其その妖術まじう奇きく怪あやしくいふぐぐ
 時ときとてうまが来きとてさるハ鼠ねずみのごとく狐この妖魅まじをあらるる和漢わかんめづるる
 いふもさうらるるどいふハ我われ雪ゆき中ちゆうハあうりをとくんとて二階にがいの窓まどのゆとあき書案しよあん
 小倚よる或時あるとき故人こじん鵬齋ほうさい先生せんせいより菓子一折かしを贈たまはりその夜寢よひんとする時狐このふり
 かのひらの菓子折かしを絆繩きんじゆあて強あつと縛くし天井てんじやうハ高たかく釣つりかきかてハりまが術じゆも施せ
 しごとくんと自傲まがりしふさて朝あふらるるばるる繩じゆハ依然いぜんとてゆとのごとく
 菓子折かしハ消失きせうするごとく猶なほ憎にくむべきハるるをりハ人の置あきするやうつふ書案しよあんの上うへハ

ありひらきつゝまづかひひらき紙もそのまじりてくさくさひきせりその妖をひ
しり不思議之或時ハ猫の声をきりて猫を呼びて溜し且喰ふ老狐ハ婦女
を妖一々溜さるもあり溜せり一女子あり髪をきりて其処ハ即一々熟睡せり
ガゴ一々の由をいふほどにも一人も仔細をきりて一女子一皆前後をあつむと
いふまじりてあつむまじりけきども事を取ていひつゝあつむまじりて狐善く氷を聽言
事國陽雜組ふ又の六本朝あつむ今猶諷訪の湖水ハ狐涉しを視て人涉り
たむ和漢相同ト狐の火を為と説はさめぐあつむまじり信けり一我が目前ハ視
しハある夜深更の頃例の二階の窓の隙ハ火のうつろを怪しと其の隙間より視
きまじりて狐雪の掘揚の上ハ在りて口より火をいひてよくまじり呼息の燃るその
態口よりまじり上ハあつむまじり寒火のごとくあつむまじりけきまじりて
のぞきわたりしハ火をいひてまじり時といひまじり時ありまじりまじり肚中の氣ハ応じりあつむ
まじりまじり氣息常ハ火をいひてまじりまじり勿論之石亭ハ雲根志ハ狐の玉のひらきまじり云

雪譜卷之中

狐火ハ玉のひらきまじりあつむまじり狐の玉とのハ物の光ると常ハ狐火と
別るまじり

○狐を捕る

友人曰我が親しき者隣村ハ夜話ハ往々飯を途の傍ハ茶鐘ありし頃
しも夏の事しき也多農業の人の置忘としてるまじりまじり腹悪きりのハ拾
ハ隠さん持飯りて主を尋ねると鐘を子ハまじりて二町をりあつむまじり
重くまじり鐘の内ハ声ありて我をいひて連行せりまじり小膽を消し鐘をまじり
逃さりしハ狐前ハまじり草の中ハ入りしり一とけり二ハまじり一時の戲まじり
まじりまじり妖魅の術ハありまじり人ハ欺きて捕らるる如何余答てハ鑊炮を以
てまじり論る番餌を以てまじり人ハ欺くをまじり怒を捨て慎むるまじり
まじりまじり知りまじりまじり喰ひて反て人をあつむまじり捕らるるまじり
まじり邪智あつむまじり豈狐のまじりまじり人ハ又是ハ似たり邪智あつむまじり悪吏

と云ふ者のあつてかく為る人ハあるまじく己ガ邪智を去る終ハ身を亡すはゆる端
然も賊然も然ハいづれも身を亡すの番餌之至善人ハ路ハ千金を視室ハ美人と
對をせども心妄ハ動さハ止ることを知りて定る事あるゆゑ之が人ハ胸ハ明なる
鏡ありて善惡を照し視てよきありきを知りて其獨を慎む之を明德の鏡と云
此鏡ハ天道さぬより誰れもく一与ハあつても磨きまててこそ是れ若かりし
時ある經學者の教ハ聞しと狐の語ハつけ大學の蹄ハひて風諫せしハ問ハ
人弱年也あつても身のちのこをさうりし者あるはありきこゝハ无用の長舌を
まどかもしいひてあつてふまうせさるるせりさて我ガ里めて狐を捕る術さあぐある
るハ小手を懐ふしと捕る術ありてその術いんとするは春陽の頃ハつりし雪も
昼の内ハ軟るるゆゑ夜あつて狐の徘徊する所ハ麥を春杵を雪中ハさう入てニッ
も三ツもきぬぐけの穴を作りかけ夜ハ入りて此穴も凍りて岩の穴のやうなるあり
さてうまか好く油液をどをちりしはまきの穴中も入さかくさて夜あけ人静りし
ころ狐ハふきさうりちりしはまきを喰ひ尽し猶さうさむらうるさむらうの穴ハあるを

雪譜卷之中

ころ狐ハふきさうりちりしはまきを喰ひ尽し猶さうさむらうるさむらうの穴ハあるを
くくんとし身をまぢり倒ふなりて穴ハ入りしをさうりしものをさうりしつてゆんとする
小尾のまじりし程ハ作りまうけする穴あるは再びしづる子叶ハ雪ハ深夜ハ
あつてはまきまじりしつりしはまきを喰ひ尽し穴をさうりしものもあつてはゆんとして
終ハ性を勞らま捕へんとするしりしものをさうりし水をくまきさうりてあるハ入り
あつりし雪の穴あるはまじりし水も漏れ狐ハ尾を振りて水ハさうりしハ入りハ切りハ
ありしを將ハ死せんともする時くるは尻をひるを避る狐尾を揺るるをさうりて
るを知り尾を振り大根を抜ぐごとくし狐を得る穴ニツも三ツも作りおくれあをり
した時ハ二足も三足も狐を引抜りあり之ハ凍りて岩のやうなる雪の穴あるはつり
土の穴ハくまき得りしものも自在をりて逃さるるさうりし雪國ハさうりしものも
雪のついでハあるせり

○鴈の代見立

我^{わが}国^{くに}雪^{ゆき}盛^{さか}る^る時^{とき}ハ鳥^{とり}の食^をを^さす^るの^一点^{てん}も^もる^るさ^あ久^く山^{さん}野^のの^鳥と^掃之^を
春^{はる}小^こい^り雪^{ゆき}降^ふり^や一^つ頃^{ころ}諸^{しよ}鳥^{とり}を^える^る二^に月^{げつ}小^こい^りて^も野^の山^{さん}一^{いつ}面^{めん}の^雪の中^{なか}
清^{せい}水^{すい}の^まじ^ま氷^{こおり}気^き温^ぬる^るゆ^え雪^{ゆき}の^まじ^ま消^きる^る処^{ところ}も^あり^こ水^{すい}鳥^{とり}の^下る^る処^{ところ}
雁^{かり}を^える^るま^じま^じ三^{さん}羽^はを^りて^己ま^じま^じ求^{もと}食^をを^える^る糞^{ふん}を^のり^て喰^くわ^るる^る処^{ところ}
目^めと^は狸^り言^ごふ^こを^雁の^代見^{けん}立^たと^いふ^雁の^かく^まる^る友^{とも}鳥^{どり}を^集ひ^ます^りて
か^とも^も求^{もと}食^をを^える^ると^て之^の朋^{とも}友^{とも}信^ます^る人^{ひと}も^耻ぢ^ぢる^るさ^あ久^くを^心を^まじ^ま徒^たの^糞
を^える^るま^じま^じ代^{だい}見^{けん}立^たの^糞を^える^るま^じま^じ種^{しゆ}の^術を^尽す^る雁^{かり}の^まじ^ま
捕^とふ^雁も^まじ^まと^てを^える^るゆ^え人^{ひと}も^あら^せず^と糞^{ふん}を^える^るま^じま^じ
か^く之^の代^{だい}見^{けん}立^たあ^らず^さあ^らせ^ず食^をを^える^る一^つ処^{ところ}に^あん^んふ^ふ土^{つち}を^うけ^ける^るま^じま^じ
智^ちあ^らる^る人^{ひと}も^あら^せず^と人^{ひと}ま^じま^じを^も知^しり^てあ^らせ^ず糞^{ふん}を^える^るま^じま^じ
其^{その}辺^へりの^矢頃^{やころ}ま^じま^じ処^{ところ}へ^人の^入る^るま^じま^じ程^{ほど}不^ふ極^{ごく}を^あせ^ずや^うあ^らる^るの^を雪^{ゆき}に^て作^{つく}り^後
小^こ入^いり^口を^つけ^内の^洞小^こ雁^{かり}の^をえ^るま^じま^じ方^{かた}不^ふ穴^{くち}を^つけ^てその^まじ^まを^ます^る雁^{かり}
雁^{かり}を^える^るま^じま^じの^穴より^鏡炮^{ぱう}の^銃口^{こう}を^いて^そう^うか^くを^思言^り
小^こあ^きん^{ごう}と^いふ^雪堂^{どう}之^の術^{じゆつ}あり^雁の^居る^處を^替わ^るる^夕暮^{ぼく}夜^や半^{はん}曉^{せう}
人^{ひと}此^{この}時^{とき}を^まち^て種^{しゆ}の^工を^尽す^ると^捕ふ^我国^{わがくに}雪^{ゆき}の^為に^あら^せず^と難^{なん}美^びハ^あら^せず^と
前^{まへ}小^こい^りる^まじ^まも^雪の^重宝^{じゆほう}も^あり^第一^{いつ}ハ^大小^{せう}雪^{せう}舟^{ふね}の^便利^{べんり}縮^{しゆく}の^製
作^{さく}雪^{せう}堂^{どう}田^{でん}舎^{しゃ}芝^し居^いの^舞臺^{ぶたい}棧^{せん}敷^{しき}花^か道^{だう}と^いふ^雪に^て作^{つく}る^辻賣^{ついで}の^居る^處賣^{うり}
物^{もの}の^臺架^かも^も雪^{ゆき}に^て作^{つく}る^是を^里言^りふ^まじ^まと^いふ^獸狩^{じゆ}追^お鳥^{とり}積^{せき}雪^{せう}家^かを
埋^うめ^却て^寒威^{えい}を^禦ぐ^夏も^山間^{さんかん}の^雪を^以て^魚鳥^{うい}の^肉を^擁包^{ようほう}か^け敗^く餒^{がう}む
雪^{せう}水^{すい}江^{かう}河^がの^源を^養ふ^るま^じま^じ外^{がい}詳^{しょう}ふ^らる^猶あ^らず^是を^あら^せず^と天^{てん}地^ちの^万物^{ばんぶつ}捨^す
て^いの^あら^せず^と捨^すて^いる^人悪^{わる}の^こ

雪譜卷之中

あ^らせ^ずと^思言^り
雁^{かり}を^える^るま^じま^じの^穴より^鏡炮^{ぱう}の^銃口^{こう}を^いて^そう^うか^くを^思言^り
小^こあ^きん^{ごう}と^いふ^雪堂^{どう}之^の術^{じゆつ}あり^雁の^居る^處を^替わ^るる^夕暮^{ぼく}夜^や半^{はん}曉^{せう}
人^{ひと}此^{この}時^{とき}を^まち^て種^{しゆ}の^工を^尽す^ると^捕ふ^我国^{わがくに}雪^{ゆき}の^為に^あら^せず^と難^{なん}美^びハ^あら^せず^と
前^{まへ}小^こい^りる^まじ^まも^雪の^重宝^{じゆほう}も^あり^第一^{いつ}ハ^大小^{せう}雪^{せう}舟^{ふね}の^便利^{べんり}縮^{しゆく}の^製
作^{さく}雪^{せう}堂^{どう}田^{でん}舎^{しゃ}芝^し居^いの^舞臺^{ぶたい}棧^{せん}敷^{しき}花^か道^{だう}と^いふ^雪に^て作^{つく}る^辻賣^{ついで}の^居る^處賣^{うり}
物^{もの}の^臺架^かも^も雪^{ゆき}に^て作^{つく}る^是を^里言^りふ^まじ^まと^いふ^獸狩^{じゆ}追^お鳥^{とり}積^{せき}雪^{せう}家^かを
埋^うめ^却て^寒威^{えい}を^禦ぐ^夏も^山間^{さんかん}の^雪を^以て^魚鳥^{うい}の^肉を^擁包^{ようほう}か^け敗^く餒^{がう}む
雪^{せう}水^{すい}江^{かう}河^がの^源を^養ふ^るま^じま^じ外^{がい}詳^{しょう}ふ^らる^猶あ^らず^是を^あら^せず^と天^{てん}地^ちの^万物^{ばんぶつ}捨^す
て^いの^あら^せず^と捨^すて^いる^人悪^{わる}の^こ

○天の網

か^よを^人惡^いを^まり^て天^{てん}罰^{ばつ}漏^{ろう}る^る魚^{うい}の^網小^こ魚^{うい}を^さす^るま^じま^じ
と^いふ^天の^網と^いふ^り新^{あたら}得^えより^三里^り上^あり^て赤^{あか}塚^{づか}村^{むら}と^いふ^{あり}山^{さん}の^とと^うり^く小

凹をりくありらふ杖をさく細糸の網をとりて鳥をさることを里言ふ赤塚
の天の網とらふ此村小窪ありや水鳥濱を慕ひくまきり山の凹を飛きたりる
らむ天の網とらふ大低ハ鷄とらふ鴨小似る鳥之美味なるや赤塚の冬至鳥
とそ遠く拾美を鷄鱗といふ書を省けりるんあぢうもと古哥あもあま
よめり

○雁の総立

かよと陸島ハ夜中盲とらり水鳥ハ夜中眼明とらふ雁ハ夜中物をさるるや
もど明之他国ハあぢう我國の雁ハあぢうハ昼ハ眠り夜ハ飛行く眠る時ハ人ハ遠き
処あぢう集り眠る此時ハ首をあげて四方をさるる雁二羽あり人ことを番鳥
とのふ求食あもあぢう之飛小列をさるる雁行とそ兵書あもあぢう人あぢう処とそ
ど居るふも位列をさるる漫あぢうむ求食時ハ衆あぢう遊ぶ時ハさるるあぢう雁中
ふ一雁ありて所為衆とそふ随ふ大将と士卒とのごとく一人のまきり又ハあぢうを
さるるのむん鳥羽とそまきをさるる餘のとりことをさるるあぢう求食とも移つとも此羽

とそまきをさるるあぢうむ幾羽も亂て飛あぢうさえ列をさるる去る里言ふことを雁の
総立とのふ雁の備あぢう軍陣の如く餘の鳥あぢうさるる之他国の雁もあぢう
田舎人あぢう珍しくとそ都會の人の話柄あぢうり

○浩海川が涉り

あぢう川源ハ信越の境よりいそ越後の内三十四里を流して千曲川小伴ハ此海小
入る此川越後の頸城の奥沼の三嶋の古志の四郡を流るや多四府見の文字
あぢうんうとあぢういふ僻る古書ハ浩海又新浮海ともさるる此川屈り曲り
廣挾言ハ尽さるるむ冬ハ一面小氷り関てその上小雪つりる所平地のごとく
まど急流岩小激し水勢絶急とらふ雪もつりるあぢう浪をさるる処もあり
渡口あぢう斧あぢう氷を碎きてとそせども終ハ氷厚くさるる力あぢう船ハ陸
ふ在りて人氷の上を涉ることを里言ふさるる此川の氷り正月のむあぢう二月のむ
物の凍るをさるるあぢうさるるさるる此川の氷り正月のむあぢう二月のむ

ゆふりくまび陽氣を得て自然と裂て流る大なるハ七八間種々の形をとり大小ひ
とくくまび川の廣き所と狭き処とふまきふ且小裂をくめて夕づふるまきをるか
まらざ一日あるハ一昼夜をくまきりくして三十四里の氷をまきくまきりて北海ふい
づそのひびき千雷のごとく山も震ふまより之世日川ふちる村くハ懐も居て外ふ
りづるるるーと他所の者ハ結海川の氷見とて花見のやうふ酒肴をくづさ山岸
ふ彩そらいろ延毛のびげ魁けいるどくまきりて大小幾万の氷片水晶の盤石のこまきりて藍
のやうる浪小漂なみひるるる目ざぬまきりて觀みたり氷を觀て樂たのしみとまける事こと暖国ぬるくにの
まらふあるどくまび世川ふまきりてくまきりて奇談きだんあり次の巻ふらりて

越後十所

美作
口
花

